

速度抑制による生活道路の交通安全対策手法



道路交通研究部 道路研究室

主任研究官 (博士 (工学)) 大橋 幸子 研究員 川瀬 晴香 研究官 河本 直志 室長 (博士 (学術)) 高宮 進

(キーワード) 生活道路、通学路、交通安全

1. 生活道路の交通安全対策の方向性

幹線道路整備の進展に伴い、自動車交通を幹線道路へ転換させ、人々が日常で利用する生活道路を真に歩行者中心の空間としていくことが可能な状況となり始めた。このような中、現在、先進国中最悪の状況にある歩行者・自転車乗用中の交通事故死者数の大規模な削減を目標に、歩行者・自転車を安全にする道路の新仕様の標準化や、対策の推進体制の構築等が進められている。

2. 生活道路の新仕様の標準化に向けた研究

国総研では、生活道路の新仕様の標準化に向けて、その根拠となる技術的知見のとりまとめを行っている。特に、車両速度が高いほど重大事故に至る割合が高いことから、道路に凸部（ハンプ）、狭窄部、屈曲部（シケイン）を設け車両速度を抑制する対策に着目し、その適切な設置方法、効果的な形状等について検討を行っている。

(1) 構内実験による形状の検討

生活道路を模した実験用走路にハンプ等を設置し、効果的な形状の検討のための走行実験を行った。

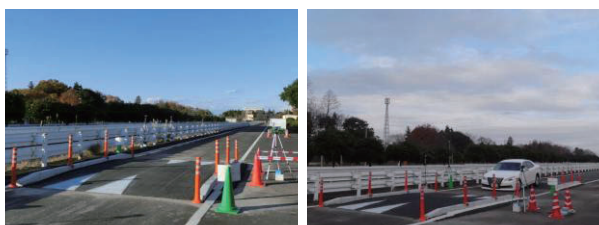


写真1 ハンプ走行実験の様子

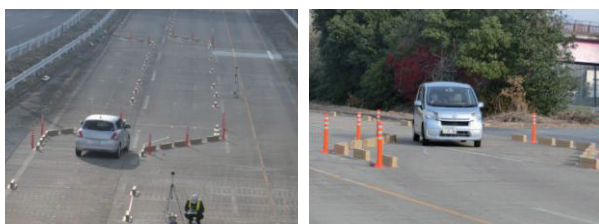


写真2 シケイン走行実験の様子

実験では、高さの異なる2種類のハンプを設置し、走行速度調査、騒音・振動調査、意識調査を行うとともに（写真1）、屈曲の度合いが異なる3種類のシケインを設置し、走行速度調査、意識調査を実施した（写真2）。これらにより、形状の違いによる効果の差の分析を進め、形状の設定を行っている。

(2) 実証実験による対策手法の検討

実道における対策推進のため、つくば市と協力し、小学校通学路において対策実施手法に関する実証実験を行った。利用者意識や各種交通データに基づく危険箇所抽出を行ったうえで、対策を立案・実施したところ、狭窄とハンプを組み合わせて設置された区間（写真3）において車両の速度が低減するなど、目的に応じた効果が確認された（図）。

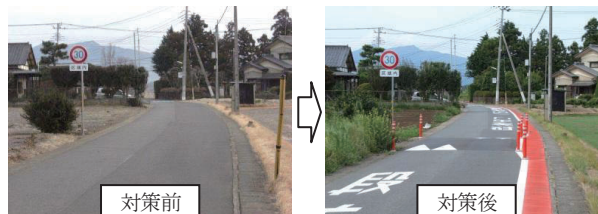


写真3 狭窄ハンプ設置区間

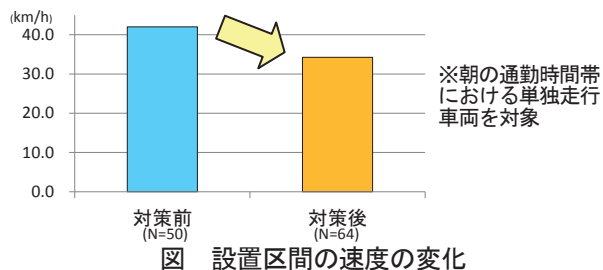


図 設置区間の速度の変化

3. 今後の展開

これらの研究は、現在国土交通省が進めている生活道路の新仕様に関する技術基準策定の中で、基礎的知見として活用される予定である。

☞ 詳細情報はこちら

1) 道路研究室HP

<http://www.nilim.go.jp/lab/gbg/index.htm>